

◎諸國流行小唄

一七〇

の縮縮加賀の絹、仙臺平では南部縞、陸奥の米澤江戸ごろ、丹
後の宮津でびんと出した、

かんくーのう

かんくーのうさうのです、きやさうです、三升ならえ、さあいは
ふみいかんさんめんこが、おはをでひうかん、さんくーとてつる
つん、

千 兩 箱

千兩箱富士の山ほど貰うてもいやよ、冥途の土産になりやせまい
大しやりくしやりよ、

いけ騒々しき
歌が流行た物

矢つ張りお前
と暮すかよい

選慮する人の
選詞かしらん

一夜五両でも妻持やいやよ、つまの思ひが恐ろしや、大しやりく
しやりしよ、

千 疊 座 敷

千疊座敷の唐紙育ち、坊ツちやまもよい子になる時は、地面をふ
やして倉建て、倉の隣に松植ゑて、松の隣に竹植ゑて、竹の隣
に梅植ゑて、梅の小枝に鈴さげて、其鈴ちやらく鳴る時は、ぼ
つちやまもさぞく嬉しかろう、

ねんくーよ

ねんくーよおころりよ、おころりお山の兎は、なせにお耳が長う
ござる、おかッさんのお腹に居た時は、琵琶の實、笹の實喰へま

洒落れた因果
應報の例かな

◎諸國流行小唄

一七一

◎諸國流行小唄

して、それでお耳が長うござる、

辨慶が

今ならば淺草
奥山で一狂言

辨慶が五條の橋に出迎へば、向へほつそり柳ぎごオ、白き衣をば

鎌に掛け、汝は誰ちやと問ふたれば、吾こそ源牛若丸、さてこそ

曲物ござんなれ、薙刀小脇にかい込んで、ちよいと突きやアちよ

いと飛ぶ、おちよおちよのちよいと突きや、おびよびよいのびよ

いと飛ぶ、チヨンがヨイヤサ、ヨイヤ〜、

とんびとろ〜

とんびとろ〜、赤い物何だ、南蠻胡椒だ、胡椒なら嘗めろ、嘗め

れば辛い、辛か水呑め、水呑めば腹がいたい、腹痛か寐て居ろ、

これがどうど
うめぐりの歌

寐て居れば蚤が喰ふ、蚤喰はいつぶせ、つぶしたくも爪がない、
爪がなきや湯へいけ、湯へ行きたくも金がない、金がなきや借り
ろ、借りても貸さぬ、貸さなか盗め、盗めば追はれる、追はれた
ら逃げろ、逃げれば捕らまる、ころんだら起きろ、起きるうちにや捕
らまる、捕らまる、

おえとこさうだ

オエトコソウダノ、紺の暖簾に伊勢屋と書いたんの、おんめ女郎
は十代傳はり、粉屋の娘たんよ、あの子よい子だあの子と添ふな
ら、三年三月も裸躰で薔薇もしよいましよ、水も汲みましよ、お
米もとぎましよ、なるだけ朝起、上る東海道は五十三次、粉箱ヤ

エラケ打込ん
だものなる哉

◎諸國流行小唄

○諸國流行小唄

ツコラサと、擔いでホイ、歩かにやなるまい、オエトニ其處のけ
たんの、

清盛公

遂に底止する
所を知らぬ歌

清盛公は火の病、山へ登るは石童丸、丸い卵も切りよで四角、兎
角浮世は色と酒、竹に雀は仙臺さんの御紋、御門くれば油賣茶
賣、高いやまから谷底見れば、見れば齒堅の齒の薬、薬峠の權
現さまよ、三度笠三味猫の皮、爺と婆があつたとサ、あたあたあ
たの観音様一寸八分、八分去つても一寸残る、残る合浦外が濱
鎌で刈るよな毛が生えた、はいた傘下駄足駄、夢の枕はどうでこ
んす、

琉球ぶし

その心入何さ
も以てうれし

琉球へおじやるなら草鞋はいておじやれ、琉球は石原小石原、シ
タリヤヨメく、シンニヨタク、

似せた小唄

○
来るかくと上下見れば、川や柳の影ばかり、
来るかくと川裾見れば、河原柳の音ばかり、

○
文はやりたし我身は書かず、ものを云へかし白紙が、

○似せた小唄

◎似せた小唄

文はやりたし我身は書かず、やるぞしら紙物を云へ、

信州信濃の新蕎麥よりも、わたしやお前の傍がよい、

信州信濃の新蕎麥よりも、なんぼ切れても主のそば、

まゝよ三升樽横手にさげて、やぶれかぶれの頬かむり、

まゝよ三度笠横頬にかぶり、やぶれかぶれの頬かむり、

大工殿より木挽がにくい、同じ中をば引分ける、

大工殿より鍛冶屋が憎い、閨のかき金鍛冶がうつ、

箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川、

箱根八里は腕でも越すが、越すに越されぬ大晦日、

坂は照るゝ鈴鹿は曇る、間の土山雨が降る、

坂城や照るゝ追分や曇る、花の松代雨が降る、

風が戸叩けやうつゝで明けて、月にはづかし我姿、

夢で戸たゝくうつゝであける、そこで狐がこんとなく、

◎似せた小唄

◎似せた小唄

潮來出てから牛堀までは、雨は降らぬに袖絞る、
大浦出てから牛込までは、雨も降らぬに袖絞る、

○
さんさ時雨か萱野の雨か、音もせで来て濡れかゝる、
さんさ時雨か萱の實胡椒、音も芹茄子瓜南瓜

○
高い山から谷底見れば、お萬可愛や布晒す、
高い山から谷底見れば、瓜や茄子の花盛り、

○
又と行くまい湯原の湯へは、三坂三里が憂いほどに、

二度と行くまい丹後の宮津、縞の財布が空になる、

小唄三十六歌仙

清流舎公川

○
空寐して待つ人眼の關を、越さぬ間にとりの聲、

井上梅雅

○
月も知るまい今宵の雪は、つもる話のあるぞとは、

辻江義明

○
水の底意の誠を照らす、月もうさ葉にへだてられ、

島村屋ひな

◎小唄三十六歌仙

嬉しい夢を
りにかがしたか

あまりしらじ
らしい顔して

兎何邪魔はい
やなものなり

さう思つてか
いるが肝要也

さて晴るゝ事
覺束なさいう

さは思ひなが
らも迷ふなり

魂も何處にか
忘れて來にし

それが惚れた
弱身なるべし

寧ろ鏡の曇り
てほしからん

粹と戀路の中
に入れたき物

戀は両角に善
意なる故にぞ

忘るゝ程なら
思ひもすまじ

こちの心さへ
當にはならぬ

◎小唄三十六歌仙

一八〇

けふは誓ひをしてかへしても、あすはかはりし人ごころ、

○ 放逐舎友芝

妻戸ひらきて一息ほつと、月にかけたる胸の雲、

○ 富士舎竹翁

戀に心は千變萬化、喜怒愛樂に會者定離、

○ 京屋 うめ

跡にわすれし扇を見れば、人の心のうらおもて、

○ 春亭 梅枝

思案して見りや皆嘘らしい、逢うて話せば實らしい、

○ 春柳樓花廓

うつり替りし我儂は、盡きぬ苦勞の十寸鏡、

○ 華林堂成保

愚痴や未練は戀路のならひ、粹はあはざる先のこと、

○ 琴廼屋欣糸

口の刃ものに數多の人の、されよくとかゝる仕誼、

○ 山内 岸女

影を眼先に見るうき人を、思出すほど忘れたい、

○ 松樹園榮枝

華陀のかゞみにうつして見ても、しれぬむかふの心意氣、

○ 遊興館一力

◎小唄三十六歌仙

一八一

◎小唄三十六歌備

待たぬ夜のよき身ながらも

まちし此身は山鳥の、尾の長々し夜を明されぬ、

七夕庵星丸

その涙がさほどに物を言ふ

心あまりて言葉の足らぬ、所へ涙がたしに出る、

鳥居本今女

襖のあかれば引留て如何に

油ながせし襖もけさは、あかぬ別れとなるつらさ、

榎園文魚

戀の出入はい

あうてぬがせた心の笠を、こぼす涙にきてかへる、

眞誠淵思若

そこの亦戀の價値なるべし

嬉しいゆふべのながめにかへて、今朝は花から夜がしらむ、

柴廼戸朝水

其涙は蜷川へも流れ行かじ

たのむ一樹にもりたる雨は、袖に一河となる涙、

北梅舎文吾

後生樂な戀の臺詞なるかな

天下泰平の世に立つ浮名、人の口まで戸はさゝぬ、

薫窓軒木華

こゝらで引下れば町内安全

ちつとさゝれて口どいて見れば、かぶりふり出す風ぐすり、

左海宗佳松

苦勞させんとて花は咲かじ

花は苦勞の身にささ草の、三つ葉四つ葉に物思ひ、

祇園榮治

疑ふ時は鬼ともなる例あり

けふも眼先に迷ひを見るは、おのが心の影法師、

登虎軒拙光

◎小唄三十六歌備

人につめられ
た方宜らんに

向ふでも同じ
ことと云はん

待つは別れの
始めと知れど

狸の間は中々
風邪をひかじ

厄介な虫もあ
ればあるもの

◎小唄三十六歌仙

一八四

これが人なら怨みやすらん、蚤にくはれし夢の跡、

胡蝶亭東園

ひとの誠を墨繩にして、おのが心に引直す、

永日庵櫻

逢ふたときはの言葉の花に、またも待つ身となりにけり、

双蝶園花登

狸寐入のかせ引かぬやう、させてやりたい八疊笠、

似水園似水

逢うて氣をもみ別れてふさぎ、それを持病の虫がすく、

今さく女

左様と思はれ
ば人と契れじ

戀しい顔に目
は初手に晦む

その吉原は戀
の闇路なるに

何でも氣長に
心の届くまで

おまへに氣を
探ませんとて

千とせふるともかはらぬ人を、まつも常盤の風の沙汰、

花橋園龜若

人を目くらにして逢ふむくひ、今は戀しい顔も見ぬ、

銘の家 劔

戀の闇路もよし原ばかり、月夜かなこそ月夜かな、

四方家名昇

昔や木の葉にうもれし中に、色はかくれぬやぶかうじ、

西村たかえ

何を思てかアノほととぎす、人の静まる夜半をなく、

八木園啞丸

◎小唄三十六歌仙

一八五

ないつそ未練の
なくて宜らん

それも戀路の
習ひなるべし

人なればまた
止む事を得ず

願見ぬが却て
身上なるべし

◎おろせ松風

一八六

あかぬ別れのうつり香までも、袖にこゝめぬ朝あらし、

直に誠のその捷徑を、しらで慾氣のまはり道、
鳥居家玉垣

春の心をこゝろでしめて、見ても花にはさそはるゝ、
松の舎露月

小唄五十人一首

おろせ松風 自庵隆達

おろせ松風簾をあげよ、今の小唄の顔見たや、

人買船 徳川家康

敵を此手で丸
めしなるべし

人買船は何をこぐ、賣らるゝく、身をしづかに漕げ、我を忍ば
い思案して、高い窓から砂をまけ、雨が降るかと云うて出て逢は
う、

文はやりたし 遊僧弄齋

その白紙が意
味深長ならん

文はやりたし我身はかゝず、物を云へかし白紙が、
浅妻舟 英一蝶

たゞ流れの水
に任せんのみ

あだし仇浪よせてはかへる浪、浅妻舟のあさましや、ア、翌の夜

◎人買船◎文はやりたし◎浅妻舟

一八七

◎住なす床

一八八

は、誰とちぎりをかはしていろを、いろをかはして枕はづかし、
いつはりがちな我が床の山、よしそれとても世の中、

住なす床

晋 其角

住なす床も飽
きや果てなん

住みなす床の一かまへ、しかも投入違ひ棚、梨子地の硯玉くしげ
ふたり寐よとの文仇、皆紅の三つ蒲團、雲を誘ひてうづだかく
一爐にたぎる松の風、殊に色ある三味線や、人たち歸る閨もあり
折敷く産のかたくの、語り残せし短夜の、とても寐られぬ憂枕
蚊帳のひとへの薄月、もるゝく、もれて淋しき夜すがら、とも
に待たるゝほとゝぎす、

率士塔の前に
誰も袖ひかじ

引かば靡きやれ

北條團醉

引かば靡きやれエイサラニ、サヨイヨイエ、花とならば散りかゝ
れ、おん身は紅葉の色、なう、日影 添ひて色まさる、エイトナ
さて世の中は定めな、身の浮草の引かば靡きやれ散らぬまに、

更けて廊の

大石良雄

更けて廊のよそほひ見れば、宵のともし火うちそむき寝の、夢の
花さへにくやあらしのさそひ来て、ねやを呼出すつれ人をのこ、
よそのさらばもまたあはれにて、らちも中戸をあくる東雲、

一力に翫寐す
るやうなる調

袖の露

油屋茂作

◎引かば靡きやれ◎更けて廊の◎袖の露

一八九

月の宿るも折
から心にくし

◎袖香爐

一九〇

白糸の絶えし契りを人訪はぬ、辛さに秋の夜ぞながき、仇に訪來
る月は恨めし、月は恨めし、明方の枕にさそふ松むしの、音も絶
えなくいといなほ、萩吹く風の音づれも、聞くやと待ちし詫し
さの、涙の露の起て思ひ、臥して丸袿の袖に乾かぬ、

袖香爐

飾屋治郎兵衛

その昔の煙に
佛の立ぬらふ

春の夜の、闇はあやなしそれかよ、香やはかくる、梅の花、ち
れど薫りの猶のこる、袂に伽羅の煙り草、きつく惜めどその甲斐
も、なき魂衣ほんにまア、柳は緑くれなるの、花を見すて、歸る
雁、

なる様にしか
ならぬ世の中

千住なる

坊主小兵衛

千住なる小塚原に立つ煙、かねて冥途のあると聞くもの、ヒツ
弾け、ウン飲め、さわぐこんだに、

同じ空なる

烏丸光廣

同じ空なる影かとおもて、見ればあやしや月さへさまと、共に見
ぬ目でかはるげな、

嬉しとも眺め
悲しとも見ん

街の柳

柳澤淇園

それ知らぬ者
なし夫ぢや者

街のやなぎ、いとたをやかに、あれ春風が吹くわいな、我が心の

◎千住なる◎同じ空なる◎街の柳

一九一

やるせなさ、思ふ殿御に知らせたい、

ひがし山

頼山陽

浮いた戀なら
避るがましか

ふとんきて、寐たる姿はもう古めかし、起きて春めく智恩院、其
樓門の夕暮に、すいたお方に逢ひもせで、すかぬ客衆によびこま
れ、山寺の入相つぐる鐘の聲、諸行無常はまゝの皮、わしはむし
やうにのぼりつめ、花の頂ざれいて見やう、花はうつらふものな
れば、葉こそをしけれく、緑のめだち色ふかみ草、

髪の霜

忍海和尚

心の奥より置
きし霜ならん

わが黒髪もしら糸の、千ひろくにまた千ひろ、うさやつらさの

ますかゝみ、いづくよりかおく霜、

彼の人を

抱一上人

彼の人の心を思へも此癢が、胸にさしこむ窓の月、ねんがあげた
ら佗住居、竹の柱のすのこえん、つゞれさせてふきりくす、肩
させ裾さへ虫の聲、

待てよ船

大窪詩佛

と云はれりや
振りも切れず

待てよ船、船よまでくまで事問はん、君は何處の如何なる國ぞ
わたしや難波の里うまれ、

雨はしきりに

頼三樹三郎

◎彼の人を◎待てよ船◎雨はしきりに

ゆふべの夢の
まだ覚めぬか

月は空にて知
らぬ顔憎らし

千萬御苦勞の
こといもなり

◎皇月雨◎うしろ髪

一九四

雨はしきりに降しきる、通りかゝりし小梅道、粹な住居の柴折戸
を、喚べど叩けど音もせず、まだお目がさめぬぢやないかいな、

皇 月 雨

柳亭種彦

さつさ雨さへいつしか晴れて、てしべんかけたと聲高く、そこで
見れば、月が鳴いたかヤレ時鳥、

▽大べらぼうの心なしの替うた、

うしろ髪

柳河春蔭

うしろ髪、引かるゝ方を眺むれば、駒形あたり有明の、月がない
たと思ひしは、誰を待乳の山ほとゝぎす、今一聲のきゝたさに、

さて、張合の
ある思ひやう

利慾なくて
そ氣は樂なれ

新婚旅行など
此處に限るよ

又ものりこむ山谷堀、

三 千 世 界

久坂玄瑞

三千世界の鳥を殺し、主と朝寐がして見たい、

まよよ三升樽

高杉晋作

儘よ三升樽横手にさげて、破れかぶれの頬かむり、

函 嶺 七 湯

其角堂永機

函嶺七湯の名寄せ、髪をゆもどに夕化粧、思ふお方をとうの澤、
しらべの瀧はどうが島、こよひの首尾を宮の下、しのぶ夜道の底

◎君は今頃◎松の葉ごし

一九六

くらく、さがせく心をおしづめ、逢へば話も跡や先、嬉しさに
木地をよせ木の細工物、よしあしの湯と云はりよとも、世間はな
れし遊山旅、

君は今頃 子品川念佛庵

忘る暇のさ
てみぢかさよ

君は今頃駒形あたり、鳴いて別れし山ほとゝぎす、月の顔見りや
思ひ出す、

松の葉ごし 公伊藤春畝

それが遊びの
秘訣なるべし

松の葉ごしと磯邊の月は、千とせふるとも變るまい、バツバ黄金
をまきちらす、

風折烏帽子 伯山田空齋

この鮎の味こ
そ上なからん

風折烏帽子腰袋つけて、清き心の長良川、流れつさせぬ幾千代か
けて、君にさゝげん鮎の魚、船端たゝいて、ホツくく、

しげく逢ふのは 子榎本梁川

と云はれても
逢ひたきもの

しげく逢ふのは互ひの毒よ、承知しながら逢ひとて、どうしても
逢はずにやゐられない、そんな逢ひたがつつちやあツきれける
ね、

蝦夷のアツシ 男岩村通俊

◎風折烏帽子◎しげく逢ふのは◎蝦夷のアツシ 一九七

昔こゝろまた
悪くはあらず

濡れて歸るが
せめて心やり

腸に血の涙の
流るなるべし

◎とめてもかへる◎こほろぎ

一九八

蝦夷のアツシは寒さを凌ぐ、ちよいと着て見よ都人、

とめてもかへる

尾崎紅葉

とめてもかへるなだめても、かへるくのみひよこく、とんだ
不首尾の裏田甫、ふられ序の夜の雨、

こほろぎ

齋藤緑雨

鳴くなこほろぎなかるゝほどは、この世稀なる仕合せものよ、泣
いてよければ苦勞は入らぬ、月は落ちたか時雨はせぬか、今の小
雨は夢ぢやゝら、獨り寐た夜の枕の手前、泣くになかれぬ身を思
へ、

雪は巴

久保田米仙

隙もる風の意
地のわるさよ

雪は巴ごふりしきる、積る口舌のそのうちに、木曾どのならです
ねた夜は、脊中合せの寒さかな、

いつしかに

侯西園寺陶庵

不自由な世の
中にも果てる

いつしかと、數ふるうちに二十餘り、三とせのけふもうらゝかに
明けて嬉しき初日かげ、緑色そふ民草の、重荷の雪も打とけて、
ホンに自由な春ぢやいな、

紅葉して

侯井上世外

◎雪は巴◎こほろぎ◎紅葉して

一九九

赤き心のいる
をや見すらん

主の手枕外す
心になれぬ故

さう云はりよ
とて鳴ぬもの

◎おらが鼻◎手枕に◎彼の人を

紅葉して、昔ながらの小倉山、君の御幸を待つわいな、木でさへ
心あればこそ、

おらが鼻 江木冷灰

起きよと云ふたとて起きるよなとても、奴ぢやないぞえおらが鼻

手枕に 子品川美水

手枕に、ひごり淋しき窓の月、空に一聲ほととぎす、思はせぶり
なつらにくさ、

彼の人を 馬越恭平

世帯染たと云
はれたい謎か

隆の家じは當
にもなるまい

そして新冬は
大に弱る事さ

彼の人を、しんに思へば此癩が、胸にさしこむ窓の月、つゞれさ
せてふきりくす、年があくればわび住居、肩させ裾させ、虫の
こゑく、世帯じみたと云はれたい、

何事も 森寛齋

何事も、いはでの森のアレほととぎす、かげで案じて居るわいな
サツサコリヤ〜、

元日は 三村周

元日は、田毎の月こそ戀しきと、翁もわかき人々も、逢へば互に
舊冬は段々、さて當年もあけましては、むづかし月の歌のかずか

◎何事も◎元日は

その仲が長く
續くか如何に

腕さへあれば
何つがもねえ

清元の稽古
雨ならん

まさかに知た
顔もなるまじ

捨小舟の流れ
にも任されで

◎ぬしさんと◎つがもねえ

二〇三

すぞ、唄つて目出たう、遊ばなくつちやアなりやせん、オホン、

ぬしさんと

松下南望

ぬしさんと、縁も築地か中洲河岸、人の噂を餘所にして、漕出す
船の灯もくらく、嬉しい仲ちやないかいな、

つがもねえ

平岡熙

つがもねえ男氣な、花の都をはるく、茲に三升の團十郎と唐
までも、人の氣にあふ水にあふ、さぞや色香も深みどり、明けて
乗込む寅の年、富士の山より最負の山の、ほんまに名高い親玉さ
んちやわいな、

相合傘

半井桃水

春雨に、相合傘の柄漏して、ツイ濡れそのし袖と袖、誰しら壁と
思ふ間に、いろと書かれて居るわいな、

玉子酒

右田寅彦

雪の合傘おくられて、にくや袂のかたくばかり、濡れて來なが
ら知らぬ顔、割つて言ひたい此胸を、忍ぶ涙の玉子酒、

捨小舟

須藤南翠

思ひ寐の、夢にもそれとみまますじま、月雪花のあけくれに、きな

◎相合傘◎玉子酒◎捨小舟

二〇三

◎影法師◎松がさね

二〇四

れし袖の露けきは、ア、いたづらな、蝶の羽風にちらされて、水に色こき米牡丹、花のいち川ともづなの、解けて甲斐なき身は捨小舟、こがれこがるゝやるせなさ、

影法師

廣津柳浪

闇は綾なしとて月は出しな

たまさかに、嬉しき首尾の二人連、ア、影法師、月が出たさて忍ぶ身は、軒端三尺、いつも闇ではないかいな、

まつがさね

大槻如電

頼とめでたき歌にて候なり

一夜あけると諸ともに、旅順の城もあけにけり、めでたくが三かさなりて、みごりはさかえむらさきは、しげるいろめをまつの

内、ちよいとさきのとのみしやうじあけて、あかねさす日のはるのみや、

浮世とて

小原芝石

君まつ乳出た

浮世とて、み空はるゝを待乳山、なくや雨夜のほとゝぎす、昔を今に忍ぶなる、君に御げんの忘れねばこそ、思ひ出さず候かしく

松風

田畑千童

さても行平畑の罪の深さよ

須磨の浦の、塩やき衣月にさへ、耻ぢらふ影の水かゝみ、姿は二つみち潮に、ぬれて情のかたを浪、かへらぬ君をまつ風の、形見の袖にのこる村雨、

◎浮世とて◎松風

二〇五

それでこそ世
は治つた物也

已惚もよき加
減にすべきぞ

松の笑顔は初
物にて愛たし

われから腐る
縁ぞ是非なき

◎鹽釜の春がすみ◎雪中松

二〇六

鹽

釜

宮島春齋

秋の嵐の音づれも、なれては友のむれ千鳥、よする渚に浮草の、
身もほそく、とたつ煙、からさくらしの鹽釜も、よそに知られぬ
楽しさや、よそに知られぬたのしさよ、

春がすみ

西行庵小文子

見て見ぬ振の袖几帳、かざせる顔に櫻散る、うら耻かしき色見せ
て、かざるはわれに手折れとの、謎はとけてもとけやらぬ、霞の
帯の七重八重、かゝるべしとは思ひきや、隔て、笑ふ春の山、

雪中松

金子静枝

あめつちの、めぐみにそだつ姫小松、うさも寒さも白妙の、雪の
ぼうしの深みどり、千代を契りのはつ笑顔、

花と月

秋蘭女史

花は言ふ、風はつれないものとは知れど、のくにのかれぬ縁ぢや
もの、ほんにさうかえ、
月は言ふ、雲はつれないものとは知れど、のくにのかれぬ縁ぢや
もの、ほんにさうかえ、

小唄終

◎花と月

二〇七

明治四十四年八月二十七日印刷
明治四十四年八月三十日發行

小唄 正價金參十錢

不許複製

編輯者

中川愛水

發行者

東京市淺草區南元町二十四番地
三輪逸次郎

印刷者

東京市淺草區森田町五番地
本城松之助

印刷所

東京市淺草區森田町五番地
本城活版所

發行所
賣捌所

電話下谷四〇三七番
振替東京一九〇四〇番

東京市淺草區森田町通南元町

大日本音樂會
いろは書房

◎聲曲界空前の大著

中川愛水君解説校訂

聲曲全書

全拾貳冊

定價一冊金參拾錢

●流派の由來 每篇卷首に十餘頁に亘りて、詳細に且つ面白く記述す。

●各派の家元 毎篇その流派頭梁の小照を載す、顔足聲を比較するも妙ならん。

●歌詞と曲譜 長唄、清元、富本、新内、常盤津、説教節、河

東、（註）東の諸流派、歌謡の整理、曲譜の各篇を記す。

●歌詞の語注、編唄、長唄、小唄、地唄、萩江、蘭入の諸流は

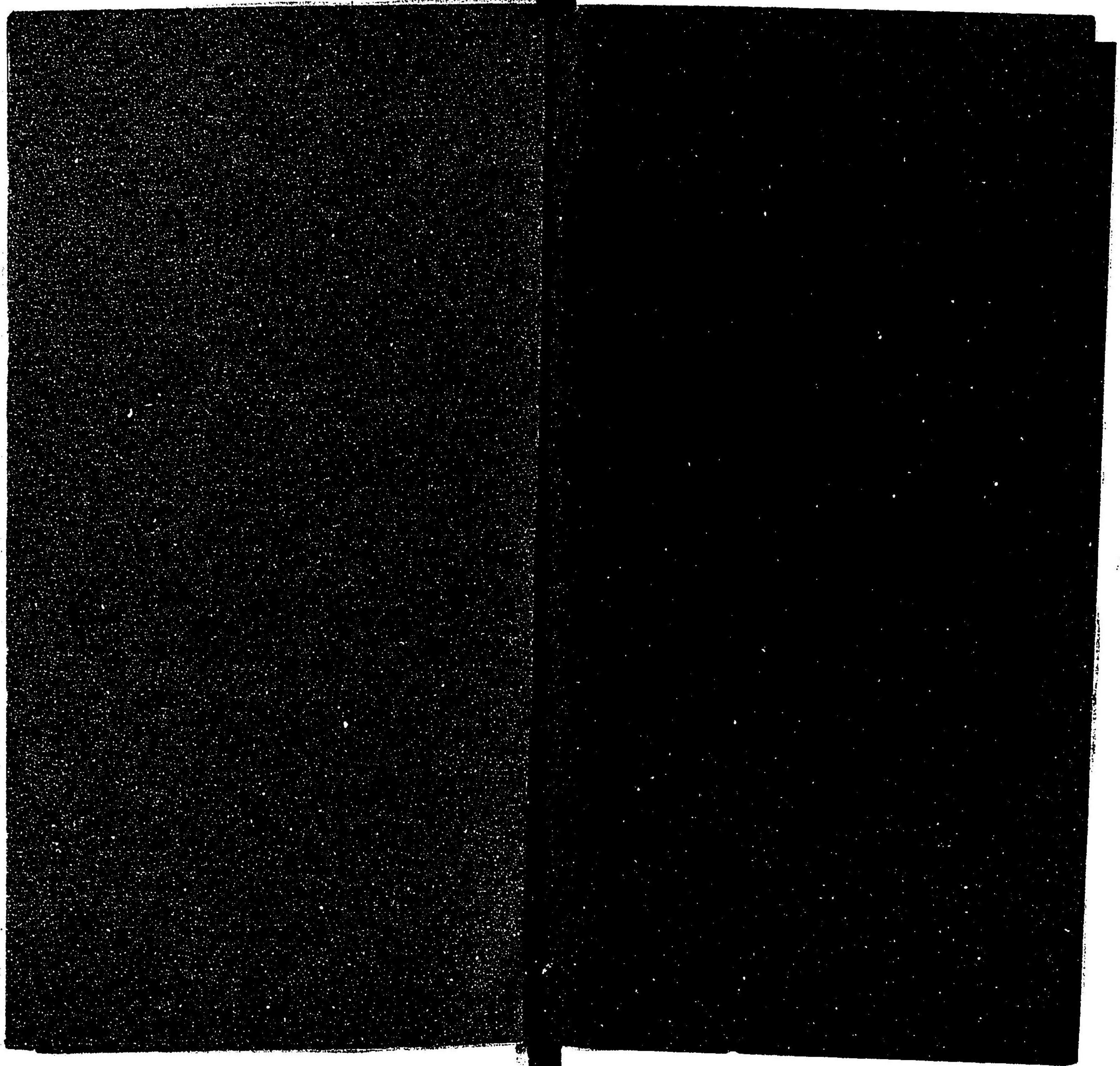
歌詞の音頭、其詳を記す。

◎藝曲家必讀の珍書

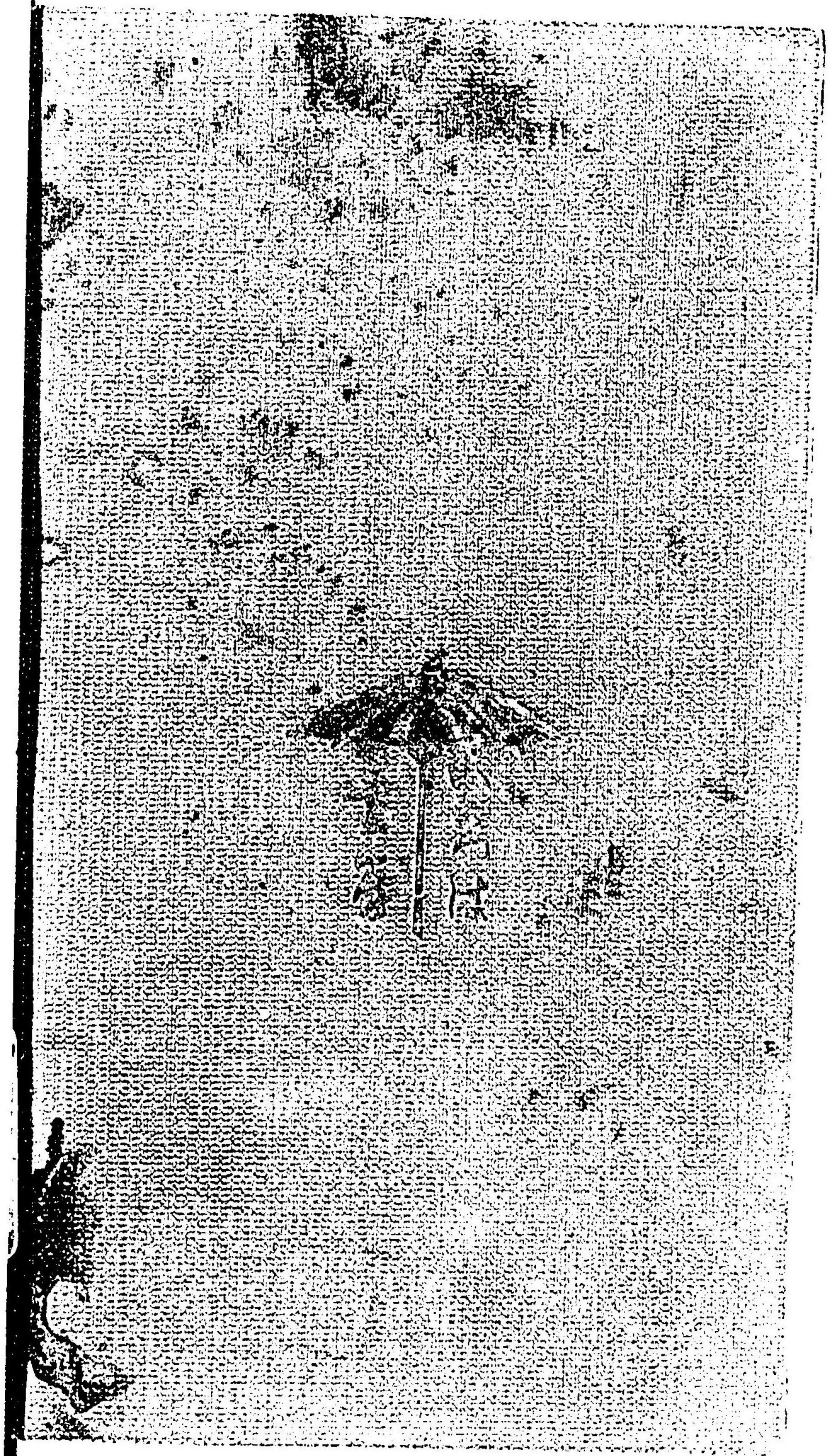
伯爵 大木 遠吉君題辭	伯爵 宗重 望君題辭	子爵 松井 康美君題辭	伯爵 柳原 義光君題辭
四の	参の	貳の	壹の
富本	清元	長唄	端唄
			兩派のうた澤全集

伯爵 東久世通禧君題辭	男爵 千家尊福君題辭	子爵 入江爲守君題辭	男爵 金子有卿君題辭
十二 <small>その</small>	十一 <small>その</small>	十 <small>その</small>	九 <small>その</small>
一蘭 中と	一荻 江東と	地 唄	小 唄
		上方唄	うた 外の 雑種 小曲

男爵 德川厚君題辭	子爵 小笠原長生君題辭	男爵 杉溪言長君題辭	子爵 秋元興朝君題辭
八 <small>その</small>	七 <small>その</small>	六 <small>その</small>	五 <small>その</small>
一説 教節	一琴 曲	一常 磐津	一新 内
	歌 生田山田 坂 派の 琴		



266
455



074033-000-6

特63-597

小唄

中川 愛氷/校

M44

CEI-1126

